

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00609

研究課題名（和文）インド論理学と東アジアの因明を架橋する『因明正理門論』の再検討

研究課題名（英文）A Reconsideration of the Nyayamukha Bridging the Indian Logic and the East Asian Yinming/Inmyo Tradition

研究代表者

小野 基 (Ono, Motoi)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：00272120

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,000,000円

研究成果の概要（和文）：仏教論理学者ディグナーガ（5-6世紀）の『因明正理門論』は古代インドの論理学を集大成したインド思想史上の画期的著作であり、漢訳され東アジアにも伝えられた。だが彼の論理学を後継者が略述した『因明入正理論』に比べ、『因明正理門論』の東アジアにおける受容は順調に進んだとは言えず、その解釈史にも不明な点が多い。本研究は、この典籍の東アジアにおける受容と解釈の歴史の一側面を、最新資料に依拠した梵文原典の推定に基づく内容理解、古代中世の東アジアの学者達が残した同書への言及の網羅的蒐集、最近再発見された日本古代の同書の註釈書の解説、江戸期に書かれた日本人学者達の註釈書の蒐集と整理を通じて、明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

5-6世紀のインドで活躍した仏教徒の著名な論理学者ディグナーガ（陳那）の『因明正理門論』という書物は、インド哲学史上の画期的な著作であったが、7世紀に大翻訳家・玄奘三蔵の手で漢訳され、中国や日本の思想界にも伝えられた。本研究は、いまだその詳細が殆ど解明されていない、この書物の東アジアにおける受容と解釈の歴史を、最新資料に基づく同書の梵文原典の再構成や、日本古代の未だ知られざる註釈書の解説、そして江戸期に書かれた日本人僧侶たちの註釈書の蒐集と整理を通じて解明し、世界の思想史とも深く繋がる東アジア仏教史の興味深い一断面を社会に知らしめることを目的とする。

研究成果の概要（英文）：The 因明正理門論 (NMu) of 陳那 is one of the most important treatises in the history of Indian logic, and was transmitted to East Asia through its Chinese translation. However, in contrast to the 因明入正理論, the acceptance of the NMu in East Asia seems to have not been easy due to its difficulty. As a result, its interpretation history has yet to be sufficiently clarified. This research project tried to elucidate the history of the treatise's acceptance and interpretation in East Asia by 1) interpreting the Chinese translation of the NMu more exactly than hitherto possible by using newly-discovered Sanskrit material regarding 陳那's later work to arrive at a better idea of its original Sanskrit form, 2) making a comprehensive collection of references by East Asian monks to this treatise, 3) examining a commentary on the treatise by a 9th century Japanese monk, and 4) collecting manuscripts of commentaries on the treatise written by Japanese monks in early modern Japan.

研究分野：印度哲学仏教学

キーワード：因明正理門論 ディグナーガ インド仏教論理学 因明 過類 集量論

1. 研究開始当初の背景

仏教哲学者ディグナーガ (Dignāga 陳那, 5-6 世紀) の中期の著作 *Nyāyamukha* は、初期のインド仏教論理学を集大成した著作であるが、チベット訳は存在せず、またその梵文原典は近年になるまでその存在すら知られていなかった。その漢訳『因明正理門論(本)』の近代における文献学的研究は 1920 年代より宇井伯寿、G. トウッチ等によって着手された。1980 年代になり、本研究の研究協力者の一人である桂紹隆博士は、『因明正理門論』と多くの並行箇所を有する同じディグナーガの後期の著作『集量論』(*Pramāṇasamuccaya*, 梵文原典は散逸)の梵文断片とチベット訳との詳細な比較検討に基づき、漢訳『因明正理門論(本)』の優れた翻訳研究を公刊した。しかし、近年に新出のジネンドラブッディ (Jinendrabuddhi, 8 世紀) の『集量論疏』梵文写本の研究が開始されるに及んで『因明正理門論』研究は新局面を迎えた。桂博士は 2005-14 年度に三度の『集量論疏』梵文写本校訂の科研プロジェクトを実施し、同書の第 3・4 章の校訂作業を通じてその内容を解明するとともに、『因明正理門論』の前半部と関わりの深い『集量論』自体の第 3・4 章の原文推定も行い、両章の偈頌の還梵を公刊した。本研究の研究代表者である小野の研究グループも、上記プロジェクトの中で同じく『因明正理門論』の後半部と関わりの深い『集量論疏』第 6 章の校訂を開始し、同時に『集量論』第 6 章の原文推定作業を進め、同章の偈頌の還梵を公表した。こうして、漢訳『因明正理門論』のインド思想史に則した理解を確立する道が開けたことにより、改めてそれを東アジアにおける『因明正理門論』の受容・解釈と対照させて、インド・東アジア両文化圏の論理学・論理的思考の類似と異質を問い直すための資料的基盤が整ってきた。

2. 研究の目的

上述の桂プロジェクトに次いで、小野は 2015-17 年度に本研究の研究協力者の一人である護山真也博士を研究代表者として実施された科研プロジェクト「インド仏教認識論・論理学の東アジア世界における受容と展開 - 因明学の再評価を目指して」に加わり、上述の『集量論疏』第 6 章の研究に基づき、『因明正理門論』後半部の内容を梵文原典を想定しつつ再検討する作業を開始した。この作業を完遂させて、近い将来に期待される『因明正理門論』梵文写本(紙写本がラサに現存)の校訂研究のための基盤を提供することが本研究の第一の目的である。また、『集量論』第 6 章はディグナーガ以前の仏教論理学で盛んに論じられた「過類」(*jāti*) という主題を扱っているため、同章に対する『集量論疏』はヴァスバンドゥ (*Vasubandhu* 世親, 4-5 世紀) の *Vādavidhi* をはじめ、『方便心論』『如実論』等の『因明正理門論』に影響を与えた先行諸文献の内容を解明する手掛かりを豊富に含んでいる。本研究は、*Vādavidhi* の梵文断片の正確な理解、『如実論』の再検討、『方便心論』と『如実論』の関係の解明を通じて、『因明正理門論』の成立史を明らかにすることを併せて意図する。

他方で、『因明正理門論』は、東アジアの仏教論理学、すなわち因明の伝統に多大な影響を与えたことが知られている。因明については、20 世紀初頭以来、中国・台湾で近代的研究が開始されたが、近年欧米で研究の機運が高まり、わが国でも武邑尚邦博士の先駆的な仕事を受けて、本研究の研究分担者である師・後藤・蜷川らが着実な成果を上げてきていた。だが、玄奘の後継者・窺基の註を通じて中国・日本の因明学の根本典籍となった『因明入正理論』には多くの註釈が現存し研究者にも注目されてきた一方で、もう一つの根本典籍『因明正理門論』に関しては、その重要性にも関わらず内容の難解さ故に、従来その東アジアにおける受容の様相は殆ど解明されてこなかった。しかし伝統的に『因明正理門論』に関心が向けられなかったわけではなく、唐代の中国では多くの註釈が書かれたことが判明している。それら唐代の註釈は殆ど残存していないが、その内容の一部を再構成しうる豊富な引用が、日本の古代・中世の学僧の註釈書の中に見出される。これを利用して唐代『因明正理門論』註釈を部分的に再構成し、その理解をインド仏教論理学の文脈と比較検討することで、インドと東アジア双方の論理的思惟の類似と異質の一端を明らかにすることができる。本研究の第二の目的は、この『因明正理門論』の東アジアの古代の註釈伝統の研究を進めることである。

さらにまた、日本の近世に『因明正理門論』の研究伝統が復活したことが知られている。ただしその歴史や思想内容は従来ほぼ未解明であり、写本の蒐集すら未だ組織的に試みられてはいない。本研究では、第三の目的として、従来既知の近世註釈の翻刻を部分的に試みるとともに、宗派系大学の図書館や地方寺院の文献調査を通じて、近世註釈の写本の蒐集・書誌学的研究に端緒をつけることである。

3. 研究の方法

以上の研究目的を果たすために、本研究では研究者を以下の 4 つの研究班に組織して役割分担を行い、研究を進めた。

(1) 『集量論』との比較研究および『因明正理門論』の成立史の研究(研究代表者・小野、研究協力者・室屋、渡辺): 『因明正理門論』後半部を従来この班の構成員が取り組んできた『集量論』第 6 章の還梵と比較しながら再検討する作業を行う。『集量論』第 6 章の還梵と

和訳を作成し、また『集量論疏』の和訳と訳註を完成させることによって、多くの並行箇所を含む『因明正理門論』の理解を深め、同書に対する東アジアの諸註釈の研究の基盤とする。また、桂博士とブレンダン・ギロン博士の『方便心論』英訳プロジェクトや、林鎮国博士とギロン博士の『如実論』英訳プロジェクト等の国際プロジェクトと連携しつつ世親の論理学書や『如実論』『方便心論』の研究を更に進展させて、『因明正理門論』の成立史を解明する。

(2)『因明正理門論』の唐時代の註釈断片の蒐集とその内容の解読研究(研究分担者・後藤、蜷川):主として我が国の善珠、蔵俊らの『因明入正理論』への註釈を用いる。その際、両註釈および窺基註の写本を組織的に収集することも試み、蜷川の窺基・蔵俊のテキストデータベース作成プロジェクトと連携しながら、両書のテキスト確定の礎とする。

(3)『因明正理門論』に対する中国唐時代の註釈の研究(研究分担者・師、研究協力者・護山):師によって再発見された9世紀日本の学僧・沙門宗の註釈の基礎研究を進め、そこに引用された円測と定實の註釈の再構成と解釈を行う。さらに、『因明正理門論』への言及も多い文軌の『因明入正理論疏』の文献学的、および思想内容の研究を進める。

(4)『因明正理門論』に対する日本近世の註釈の写本蒐集と書誌学的研究(研究分担者・稲見、研究協力者・護山、小林):従来知られている近世日本の『因明正理門論』への註釈書類を収集・電子化して、その内容の一部を詳細に検討する。また、これまで十分に調査されてこなかった宗派系大学図書館所蔵の古写本、地方寺院所蔵の古写本の所在確認、および重要なものの部分的翻刻と内容分析を行う。

研究の遂行に当たっては、各々4つの研究グループで個別的に各々の課題に取り組んだ他、毎年2回の定期的研究会を開催して相互に研究の成果を報告し、情報を共有しながら進めた。また、海外の研究協力者(台湾国立政治大学・林鎮国教授、カナダ・マギル大学・ブレンダン・ギロン教授、オーストリア学士院・室屋安孝博士、渡辺俊和博士)を招聘して国際ワークショップを開催して議論を深めた。

年度毎の研究集会・ワークショップ等の開催状況は以下のとおりである。

2018年度

2018年4月26-28日 International workshop「《論軌》與《如實論》「誤難」研究工作坊」(台湾国立政治大学)参加。招待講演(小野、室屋)

2018年5月19日 第1回(キックオフ)研究集会(筑波大学)

2019年1月27日 第2回研究集会「日本近世の『正理門論』註釈書の再評価」(龍谷大学); 龍谷大学図書館での資料調査

2019年3月19-21日 International Workshop “The research sessions on the sixth chapter of Jinendrabuddhi’s *Pramāṇasamuccayaṭīkā* and the *jāti* section of the *Nyāyamukha*” (筑波大学)主催

2019年3月26-27日 International Workshop “The research sessions on the *Śāntarakṣita’s Vādanīyāṭīkā*” (筑波大学)主催

2019年3月28-29日 International Workshop “The comparative reading between the second chapter of the *Rushi lun* and the *jāti* section of the *Vādaśāstra*” (筑波大学)主催

2019年度

2019年6月28日-7月1日 International workshop “Prajñākaragupta and Yamāri on Problems of General Validity” (Leipzig University) 参加。招待講演(小野、稲見、護山、小林)

2019年7月8日-8月6日 Research sessions “The sixth chapter of Jinendrabuddhi’s *Pramāṇasamuccayaṭīkā* and the *jāti* section of the *Nyāyamukha*” (Vienna, Austrian Academy of Sciences) 共催

2019年7月9日-8月7日 Research sessions “*Śāntarakṣita’s Vādanīyāṭīkā*” (Vienna, Austrian Academy of Sciences) 共催

2019年9月9日 第3回研究集会「各班研究報告 九州国立博物館所蔵の文軌『因明入正理論疏』について *Pramāṇasamuccayaṭīkā* 第6章の梵文再建について、他(龍谷大学)

2020年2月3-5日 第4回研究集会、ならびに写本調査「大分県中津市近郊の浄土真宗寺院所蔵の『因明正理門論』の近世註釈の写本の調査」(大分県中津市)

2020年3月19-21日 Workshop “The research sessions on the sixth chapter of Jinendra-buddhi’s *Pramāṇasamuccayaṭīkā* and the *jāti* section of the *Nyāyamukha*” (筑波大学)主催

2020年度

2020年9月19日 第5回研究集会「各班の研究報告 *Pramāṇasamuccayaṭīkā* 第6章の再建と『因明正理門論本』 沙門宗註の可得相似の項に現れた円測と定

	賓の解釈の相違 - 師論文の解釈の検討 - 善珠『明燈抄』・蔵俊『大疏抄』データベースについて 江戸時代の浄土真宗学僧の『正理門論』研究について」(筑波大学 オンライン開催)
2021年3月11日	第6回研究集会「各班の研究状況報告と本年度日本印度学仏教学会学術大会におけるパネル発表について」(筑波大学 オンライン開催)
2021年度	
2021年9月	日本印度学仏教学会第72回学術大会(大谷大学 オンライン開催)パネル発表C「漢訳『因明正理門論』研究の現在」にて、4年間のプロジェクトの成果の概要を発表(小野、稲見、渡辺、後藤、護山)
2022年1月8-9日	International Workshop “Reading Dharmapāla and Bhāviveka” (台湾 国立政治大学 オンライン開催)参加。研究発表(小野、護山、渡辺)
2022年3月24日	第7回(最終)研究集会「4年間の研究の総括と今後の展望」(筑波大学 オンライン開催)

4. 研究成果

上記のように最初の2か年は海外の研究者の招へいによる国際ワークショップの開催や、海外の学会やワークショップでの研究発表、さらに国内の写本調査旅行を活発に行い、順調に研究が進展した。2019年度末からはコロナ禍の影響により国際ワークショップ等の対面開催が不可能になり、また調査旅行も難しくなったが、年2回の研究集会をオンラインで継続し、また各研究者が各自オンラインによる国際ワークショップに参加したり論文や研究書を公刊することで、以下のような研究成果を得ることができた。また最終年度には日本印度学仏教学会学術大会(オンライン開催)で本プロジェクトの成果報告を目的としたパネル発表を企画し、各班の代表者が各々の成果の概要を発表した。

各班毎の研究成果の概要

(1) 小野班(小野、室屋、渡辺)

『集量論』第6章に対する梵文『集量論疏』の校訂研究を終えるとともに、『集量論』第4章に対する梵文『集量論疏』の校訂の出版準備をも完了した。それらの成果は二巻の校訂本として順次、一両年中に出版の予定である。併せて『因明正理門論』後半部との多数の並行箇所を含む『集量論』の上述の2章の梵文再建の暫定版を作成した。これらは上記校訂本の出版と同時にオーストリア科学アカデミーのWebサイトにオンライン公表の予定である。『集量論』第4・6章の還元梵文には『因明正理門論』後半部との並行箇所を詳細に註記したが、この成果は近い将来に期待される『因明正理門論』梵文写本の校訂研究の一助となろう。当該写本には比較的大きな焼損部分があるとされ、漢訳や関連文献との比較検討が重要となる。他方、『因明正理門論』の成立史の解明に関しては、同書に最大の影響を与えたとされるヴァスバンドウの Vādaividhi の断片の英訳を試みると共に、『如実論』の書き下しと現代語訳の作成をほぼ終了した。また、『因明正理門論』が体系化した「過類」の概念の後代への影響を探る手始めとしてインド仏教中観派における「過類」の取り扱いを検討した。

(2) 後藤班(後藤、蜷川)

『因明入正理論』に対する大部の二つの註釈、善珠の『因明入正理論疏明燈抄』および蔵俊の『因明大疏抄』のデータベース化の準備を進め、それらに現れる引用を中心に『因明正理門論』への言及箇所および『因明正理門論』の註釈書の断片の蒐集にあたった。近日中に引用文のデータベースをしかるべきWebサイトにて公開の予定である。

(3) 師班(師、護山)

唐時代の『因明正理門論』研究の状況を明らかにする最重要資料と目される沙門宗の『因明正理門論疏』の解読研究に携わり、特に「可得相似」と「至非至相似」の二概念に関する註釈箇所の解読を行った。その際、沙門宗の引用する円測・定賓・文軌などの諸註釈の特徴に注目し、沙門宗がそれらの諸註釈に依拠するあり方を分析した。他方、『因明正理門論』を理解する上でも重要な文軌『因明入正理論疏』巻一の九州国立博物館所蔵写本を調査して写真撮影を行い、同写本が従来のテキストを修正しうる重要な資料であることを確認した。

(4) 稲見班(稲見、護山、小林)

従来公刊されている寶雲疏をはじめとする幾つかの近世の因明文献を取り上げてその内容の一部を精査した。また龍谷大学図書館と大谷大学図書館所蔵の近世因明文献の稀覯本を調査して栄性『因明正理門論註釋』他三点の註釈書の所在を確認し、近世初期の浄土真宗系の学者による『因明正理門論』研究の再興の様子を明らかにする手掛かりを得た。さらに

近世の因明研究に重要な役割を果たした九州豊前地区の浄土真宗寺院二か所を調査し、従来報告されていない貴重な資料群を発見した。それらのうち月珠・大年・円澄等の註釈を個別事例に関して検討し、彼らと寶雲の解釈の異同を明らかにすることで近世北部九州の真宗僧侶たちの『因明正理門論』研究の状況を解明する端緒をつけた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 21件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 17件）

1. 著者名 小野基	4. 巻 70/2
2. 論文標題 漢訳『因明正理門論』研究の現在(第72回学術大会パネル発表報告)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 (221)-(222)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲見正浩	4. 巻 2
2. 論文標題 欺かない認識 - PramANavArttikAlaGkAra ad PV II 1和訳研究 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ブラジュニャーカラグプタ研究	6. 最初と最後の頁 27-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 蜷川祥美	4. 巻 21
2. 論文標題 日本法相宗における因明研究の特異性について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 後藤康夫	4. 巻 21
2. 論文標題 興聖寺本『因明入正理論』の翻刻読解研究(中) - 附: 因明論理考 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 81-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲見正浩	4. 巻 69/2
2. 論文標題 再考：ディグナーガのpakSAbhAsa説 PS III 2b2-d1の読み方	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 (125)-(131)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲見正浩	4. 巻 1
2. 論文標題 ブラジュニャーカラグプタ研究史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ブラジュニャーカラグプタ研究	6. 最初と最後の頁 3-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲見正浩	4. 巻 1
2. 論文標題 認識は単一か多数か PramANavArttikAlaGkAra ad PV III 208-211;221和訳研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ブラジュニャーカラグプタ研究	6. 最初と最後の頁 139-210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shigeki Moro	4. 巻 11(1)
2. 論文標題 Sthiramati, Paramartha, and Wonhyo: On the Sources of Wonhyo's Chungbyon punbyollon so	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Korean Religions	6. 最初と最後の頁 23-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1353/jkr.2020.0000	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 室屋安孝	4. 巻 5
2. 論文標題 玄奘訳『因明正理門論本』の二つの本文系統について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本古写経研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 45-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤康夫	4. 巻 20
2. 論文標題 興聖寺本『因明入正理論』の翻刻読解研究(上)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 75-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 師 茂樹, 上杉 智英	4. 巻 52
2. 論文標題 花園大学情報センター(図書館)・今津文庫資料の調査報告: 大乘起信論・大乘経典写本断簡を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 花園大学文学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 87-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 後藤康夫	4. 巻 19
2. 論文標題 敦煌写本『因明入正理論』についてーある一つの古形をめぐるー附: 翻刻ー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 51-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 蜷川祥美	4. 巻 19
2. 論文標題 金澤文庫蔵『法華玄賛文集』巻八十について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 3-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 師 茂樹	4. 巻 なし
2. 論文標題 傳弘法大師・草書寫本斷簡群について: 圓測『成唯識論疏』斷簡 を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東アジアに流伝した韓国仏教文献と思想	6. 最初と最後の頁 181-219
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 師 茂樹	4. 巻 29(2)
2. 論文標題 Metalogic in East Asia: Discussion on the Antinomic Reason (*viruddhAvyabhicArin) in P'an piryang non	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Journal of Buddhist Thought & Culture	6. 最初と最後の頁 69-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.16893/IJBTC.2019.06.2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 桂 紹隆	4. 巻 38
2. 論文標題 ブツダの教え 此れあれば、彼あり。此れなければ、彼なし	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 インド学チベット学研究	6. 最初と最後の頁 12-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 護山真也	4. 巻 68/1
2. 論文標題 作有縁性 (satpratayakartRtva) について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 (174)-(181)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小野基	4. 巻 67/2
2. 論文標題 中観派における過類 (jAti)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 (134)-(141)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲見正浩	4. 巻 70
2. 論文標題 世俗の眞実とは何か - クマーリラの批判に対するプラジュニャーカラグプタの回答 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 哲學	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲見正浩	4. 巻 67/1
2. 論文標題 仏教論理学派の論証式	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 (155)-(162)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 師茂樹	4. 巻 46(16)
2. 論文標題 因明学の過去・現在・未来	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 128-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤康夫	4. 巻 11
2. 論文標題 在東亜的佛教邏輯学之開展—日本因明之特色	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 因明	6. 最初と最後の頁 313-324
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤康夫	4. 巻 33
2. 論文標題 中国因明における“pakSa” 宗 の“viziSta” 差別 について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国 - 社会と文化	6. 最初と最後の頁 106-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shoryu Katsura	4. 巻 56-57
2. 論文標題 The Mode of Argumentation in the Fangbian xin lun / *UpAyahRdaya	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Wiener Zeitschrift fuer die Kunde Suedasiens	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shinya Moriyama	4. 巻 56-57
2. 論文標題 On dharmisvarUpaviparItasAdhana	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Wiener Zeitschrift fuer die Kunde Suedasiens	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計29件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 14件)

1. 発表者名 Motoi Ono
2. 発表標題 The jAti in the MAdhyamika — Different Approaches between BhAviveka and CandrakIrTi
3. 学会等名 Online Workshop “Reading DharmapAla and BhAviveka”. 台湾国立政治大学・宗教研究所 (Taipei) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 稲見正浩
2. 発表標題 近世日本の『因明正理門論』研究
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第72回学術大会 パネル発表C 漢訳『因明正理門論』研究の現在
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 後藤康夫
2. 発表標題 因明漢文文献データベース作成の意義
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第72回学術大会 パネル発表C 漢訳『因明正理門論』研究の現在
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡辺俊和
2. 発表標題 サンスクリット語等の資料から見る漢訳『因明正理門論』
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第72回学術大会 パネル発表C 漢訳『因明正理門論』研究の現在
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 師茂樹
2. 発表標題 伝弘法大師・草書写本断簡群のデータ共有に向けて
3. 学会等名 前近代日本宗教ワークショップ（PJRW）ラウンドテーブル「仏教関連資料デジタルデータ共有の現在と可能性」（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 師茂樹
2. 発表標題 新羅唯識研究の現況：写本研究を中心に
3. 学会等名 龍谷大学世界仏教文化研究センター・シンポジウム「唯識仏教（法相教学）の伝来と展開 中国・新羅・日本」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 稲見正浩
2. 発表標題 再考：ディグナーガのpakSAbhAsa説 PS III 2b2-d1の読み方
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第71回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 師 茂樹
2. 発表標題 東アジアの仏教論理学（因明）について
3. 学会等名 論理学友の会 第3回：論理の多義性、論理学の学際性
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 師 茂樹
2. 発表標題 九州国立博物館蔵写本・文軌『因明入正理論疏』巻一について
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第71回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Motoi Ono
2. 発表標題 A Reconsideration of Prajñākaragupta's interpretation of Dharmakīrti's two definitions of pramāṇa
3. 学会等名 Workshop ' Prajñākaragupta and Yamāri ' . Leipzig, 28th June-1st July. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masahiro Inami
2. 発表標題 Conventional Validity - Prajñākaragupta ' s interpretaion of PV II 4d-5a -
3. 学会等名 Workshop ' Prajñākaragupta and Yamāri ' . Leipzig, 28th June-1st July. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 師 茂樹
2. 発表標題 傳弘法大師・草書寫本斷簡群について：圓測『成唯識論疏』斷簡を中心に
3. 学会等名 東アジアに流伝した韓国仏教文献と思想（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shigeki Moro
2. 発表標題 Maintainers of a Destroying World: A Doctrinal Discussion
3. 学会等名 2019 Annual Meeting of the American Academy of Religion（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shoryu Katsura
2. 発表標題 Mark Siderits on anumAna
3. 学会等名 Buddhist Philosophy: The State of the Field, 2019 Numata Symposium in honor of the 35th anniversary of the Numata Chair Program, the University of California, Berkeley（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shoryu Katsura
2. 発表標題 Mark Siderits on anumAna
3. 学会等名 Philology, Philosophy and the History of Buddhism: 60 Years of Austrian-Japanese Cooperation, the University of Vienna.（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1 . 発表者名 Shoryu Katsura
2 . 発表標題 BhAviveka ' s Proof Formulation Estimated by DignAga ' s Logic
3 . 学会等名 5th International Workshop on Madhyamaka Studies Madhyamaka and YogAcAra: A Dialogue between Two Main Streams of MahAyAna Buddhist Philosophy, Ryukoku University. (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Yasutaka Muroya
2 . 発表標題 A preliminary report of the VAdanyAyaTIka project
3 . 学会等名 Research Colloquium, Institute for the Cultural and Intellectual History of Asia, Austrian Academy of Sciences
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 小野基
2 . 発表標題 中観派における過類
3 . 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Motoi Ono, Yasutaka Muroya
2 . 発表標題 VAdavidhi's Theory of False Rejoinders (JAti) - An English Translation of Fragments and Their Parallel Passages in the Rushi lun -
3 . 学会等名 《論軌》與《如實論》「誤難」研究工作坊 (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 稲見正浩
2. 発表標題 仏教論理学派の論証式
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲見正浩
2. 発表標題 仏教論理学派における因果性確定をめぐる議論
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会 パネル発表A
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 師茂樹
2. 発表標題 海を越えた因明問答：8世紀における因明唐決とその回答
3. 学会等名 北京大学因明論壇・第三講（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 師茂樹
2. 発表標題 「理門論問答抄」について
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 師茂樹
2. 発表標題 Sthiramati, ParamArtha, and Wonhyo: On the sources of Wonhyo's Jungbyeon bunbyeollon so
3. 学会等名 2018 Annual Meeting, American Academy of Religion (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 師茂樹
2. 発表標題 Metalogic or Paradox: Discussion on ViruddhAvyabhicArin in Panbiryangnon
3. 学会等名 元暁『判比量論』 - 文献と思想の再照明 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 師茂樹
2. 発表標題 因明研究の現状と課題
3. 学会等名 平成30年度 大谷大学仏教学会 公開講演会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 後藤康夫
2. 発表標題 玄奘訳『因明入正理論』の理解について
3. 学会等名 日本古写経研究所平成30年度第1回公開研究会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桂 紹隆
2. 発表標題 パネル「インド哲学における因果性確定の方法をめぐって」のコメント
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shoryu Katsura
2. 発表標題 bhAva, abhAva, svabhAva and parabhAva in the MUIamadhyamaka-kArika chapter 15
3. 学会等名 第四回国際中観ワークショップ(国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計20件

1. 著者名 楠 淳澄、後藤 康夫	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 1484
3. 書名 貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究－「別要」教理篇・上巻	

1. 著者名 蜷川祥美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 1484
3. 書名 楠淳澄・後藤康夫編『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究－「別要」教理篇・上巻(134-184; 605-642; 908-926; 1322-1352; 1353-1378頁担当)	

1. 著者名 師茂樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 563
3. 書名 佐久間秀範他編『玄奘三蔵：新たなる玄奘像をもとめて』所収「玄奘が学んだ仏教知識論（因明）（226-247頁担当）」	

1. 著者名 師茂樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 248
3. 書名 最澄と徳一 仏教史上最大の対決	

1. 著者名 Motoi Ono	4. 発行年 2020年
2. 出版社 China Tibetology Publishing House	5. 総ページ数 458
3. 書名 Sanskrit Manuscripts in China III. Proceedings of a Panel at the 2016 Beijing International Seminar on Tibetan Studies, August 1 to 4. Ed. by B. Kellner, J. Kramer, X. Li. Motoi Ono, "The Importance of the PramANasamuccayaTIKA manuscript for Research on the Buddhist VAdA Tradition." 289-330.	

1. 著者名 Motoi Ono	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Arbeitskreis fuer Tibetische und Buddhistische Studien Universitaet Wien.	5. 総ページ数 304
3. 書名 Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia. Ed. by S. Moriyama. Motoi Ono, "A Reconsideration of Pre-DignAga Buddhist Texts on Logic - the *UpAyahRdaya, the Dialectical Portion of the Spitzer Manuscript and the *TarkazAstra." 19-52.	

1 . 著者名 Motoi Ono	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 Austrian Academy of Sciences Press	5 . 総ページ数 555
3 . 書名 Reverberations of Dharmakīrti 's Philosophy. Proceedings of the Fifth International Dharmakīrti Conference, Heidelberg, August 26 to 30, 2014. Eds. B. Kellner, P. McAllister, H. Lasic and S. McClintock. Motoi Ono, On pramāṇabhūta - The Change of Its Meaning from Dignāga to Prajñākaragupta. 343-361.	

1 . 著者名 Masahiro Inami	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 Arbeitskreis fuer Tibetische und Buddhistische Studien Universitaet Wien.	5 . 総ページ数 304
3 . 書名 Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia. Ed. by S. Moriyama. Masahiro Inami, "Pre-Dharmakīrti Interpretations of Dignāga 's Theory of pakṣabhāsa." 181-234.	

1 . 著者名 Masahiro Inami	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 Austrian Academy of Sciences Press	5 . 総ページ数 555
3 . 書名 Reverberations of Dharmakīrti 's Philosophy. Proceedings of the Fifth International Dharmakīrti Conference, Heidelberg, August 26 to 30, 2014. Eds. B. Kellner, P. McAllister, H. Lasic and S. McClintock. Masahiro Inami, "Two Kinds of Causal Capacity: sāmānyā zaktiḥ and pratiniyāta zaktiḥ." 155-176.	

1 . 著者名 Yasutaka Muroya	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 Arbeitskreis fuer Tibetische und Buddhistische Studien Universitaet Wien.	5 . 総ページ数 304
3 . 書名 Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia. Ed. by S. Moriyama. Yasutaka Muroya, "On a Fragment of Dignāga's Nyāyamukha." 93-150.	

1 . 著者名 Toshikazu Watanabe	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 Arbeitskreis fuer Tibetische und Buddhistische Studien Universitaet Wien.	5 . 総ページ数 304
3 . 書名 Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia. Ed. by S. Moriyama. Toshikazu Watanabe, "On the Concept of nyUna in DignAga's Theory of Fallacy." 151-179.	

1 . 著者名 Shigeki Moro	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 Arbeitskreis fuer Tibetische und Buddhistische Studien Universitaet Wien.	5 . 総ページ数 304
3 . 書名 Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia. Ed. by S. Moriyama. Shigeki Moro, "Was there a dispute between DharmapAla and BhAviveka?: East Asian discussion on the historicity of the proof of zUnyata." 287-304.	

1 . 著者名 Shinya Moriyama	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 Arbeitskreis fuer Tibetische und Buddhistische Studien Universitaet Wien.	5 . 総ページ数 304
3 . 書名 Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia. Ed. by S. Moriyama. Shinya Moriyama, "" Kuiji's Analysis of the Four Kinds of Contradictory Reasons." 261-286.	

1 . 著者名 Shigeki Moro	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 World Scholastic Publishers	5 . 総ページ数 -
3 . 書名 From Chang'an to NAlandA: The Life and Legacy of the Chinese Buddhist Monk Xuanzang (602-664) (Proceedings of the First International Conference on Xuanzang and Silk Road Culture). Ed. by C. Shi, J. Chen. Shigeki Moro, " Biography as Narrative: Reconsideration of Xuanzang's Biographies Focusing on Japanese Old Buddhist Manuscripts". 252-269.	

1. 著者名 師 茂樹	4. 発行年 2020年
2. 出版社 山喜房佛書林	5. 総ページ数 823
3. 書名 『仏教思想の展開：花野充道博士古稀記念論文集』（担当箇所：最澄『通六九証破比量文』の思想史的位 置：二比量を中心に．553-574頁）	

1. 著者名 蜷川祥美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 615
3. 書名 楠淳證・野呂靖・亀山隆彦編『日本仏教と論義』（担当箇所：因明論頁義「有為相量」について 97 117 頁）	

1. 著者名 後藤康夫	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 615
3. 書名 楠淳證・野呂靖・亀山隆彦編『日本仏教と論義』（担当箇所：因明論義の形成と展開－善珠における論証 主題（宗pakSa）・根拠（因hetu）・喩例（喩 dRSTAnta）の三支を中心として－ 95-124頁）	

1. 著者名 Motoi Ono; Jun Takashima; Jun ' ichi Oda	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA) Electronic Publication (https://publication.aa-ken.jp/). Tokyo University of Foreign Studies.	5. 総ページ数 1586
3. 書名 Keyword In Context Index to Dharmakīrti's Sanskrit Texts (enlarged and revised edition)	

1. 著者名 師茂樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 芙蓉書房出版	5. 総ページ数 658
3. 書名 芳井敬郎名誉教授古希記念会編『京都学研究と文化史の視座』；師茂樹「大西祝の因明理解」、329-339頁	

1. 著者名 小野基	4. 発行年 2019年
2. 出版社 株式会社 文学通信	5. 総ページ数 384
3. 書名 デジタル学術空間の作り方（下田正弘・永崎研宣編）；小野基「仏教論理学研究の現在と人文情報学」、151-167頁。	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	蜷川 祥美 (Ninagawa Sachiyoshi) (60310661)	岐阜聖徳学園大学短期大学部・その他部局等・教授 (43704)	
研究分担者	稲見 正浩 (Inami Masahiro) (70201936)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	
研究分担者	師 茂樹 (Moro Shigeki) (70351294)	花園大学・文学部・教授 (34313)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	後藤 康夫 (Goto Yasuo) (90537052)	龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員 (34316)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	桂紹隆 (Katsura Shoryu)		
研究協力者	護山真也 (Moriyama Shinya)		
研究協力者	小林久泰 (Kobayashi Hisayasu)		
研究協力者	渡辺俊和 (Watanabe Toshikazu)		
研究協力者	室屋安孝 (Muroya Yasutaka)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

国際研究集会 International Workshop on the comparative reading between the second chapter of the Rushi lun and the jAti section of the VAdavidhi	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 The research sessions on the ZAntarakSita's VAdanyAyaTIKA	開催年 2019年～2019年

国際研究集会 《論軌》與《如實論》「誤難」研究工作坊	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 The research sessions on the sixth chapter of Jinendrabuddhi's PramANasamuccayaTIKA and the jAti section of the NyAyamukha	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	Leipzig University			
オーストリア	Austrian Academy of Sciences			
カナダ	McGill University			
その他の国・地域 台湾	National Chengchi University			